



翠巒 Mini Press 第165号 2019/11/18

編集・発行 高崎高校新聞部

### バレーボール部

## 前商との激戦の末 惜敗

### 5年ぶりの決勝進出

10月26、27日と11月2日に第72回全日本バレーボール高等学校選手権大会群馬県代表決定戦が行なわれ、計32校が参加した。

シード権を持っている高高は、3回戦の館林戦からの出場だった。館林に勝利し、準決勝で明和県央に勝利した。決勝戦は、3連覇を狙う強豪前橋商業との1戦だった。デュースまでもつれた第1



#### スパイクを打つ高高の選手

野航君(2の6)は、「これまで、ネット際に落とすサーブやサーブキャッチを練習してきた。フルセットで体力的に辛かった。負けてしまい悔しい」と今大会について語った。

セットは前橋商業が28対26で先取した。高高はエースを中心に積極的な攻めと高いブロックで第2、第3セットを奪い返した。第4セットでは、前橋商業の巧みなアタックやクイックに苦戦を強いられ、イーブンに持ち込まれた。第5セットは両校ともに総力戦で、1点ずつ点を重ねるシーソーゲームとなった。最後は前橋商業のダイレクトで試合の幕を閉じた。結果は、セットカウント2対3で前橋商業が勝利した。両校の試合は応援に来ていた両校の保護者や応援団を大いに沸かせた。

また、「3年生が残してくれたものが大きい。それを大切に、新人戦もがんばってきたい」とこれからの意気込みを語った。(清水)

## サッカー部 伊商に敗れる

### 『個々の力の差を感じた』



10月20日から11月24日にかけて、令和元年度群馬県高等学校サッカー選手権大会決勝トーナメントが行なわれている。初戦で高崎東に5対0で快勝した高高は、10月27日、コレイ前橋フットボールセンターにて伊勢崎商業と一戦

#### ドリブル突破を図る高高の選手

伊勢崎商業戦は相手ゴールのキックオフで試合の幕が上がった。前半約10分、高高は先制点を許してしまう。中盤にも追加点を奪われ、2点を追いかける展開となった。後半は、高高が積極的に得点チャンスを作る場面が多く見られた。しかし、高高的の粘りを交えた。去年敗れた因縁の相手であったが、0対2と雪辱を果たせなかった。

高崎東戦について、キャプテンの大鼓隆弘君(2の5)は、「前半終盤で先制して主導権を握れた。後半は、相手のモチベーションが低下とスタミナ切れで4点を挙げることができた」と話した。

も報われず前半の得点があるまま決勝点となり試合の幕は下りた。試合後、大鼓君は、「相手には3年生の選手もいて個々の力の差を感じた。負けたこともそうだが、前半に自分たちのプレーができなかったことが悔しい。一方で、後半は、コート幅(68m)を活用し攻めることができた」と話した。

サッカー部は、1月に県の新人大会を控えている。「早々に負けてしまったため、トレーニング期間は他校よりも長い。練習試合も通して個々のスキルや戦術をより強化していくと思う」と今後について語った。(宮内)

## 弓道部 県新人 全国大会出場ならず

10月20日にぐんま県弓道大会が行なわれ、今大会は、抜大会の出場権をかけた大会である。試合方法



#### 弓道部部長の井田義基君

「結果は48射中23中で、とりわけが良いとは言えない。1本目を中てて流れを掴もうとしたが、会場の雰囲気によって緊張してしまい、いつも通りに引けなかった。」と反省点を述べた。また、次の大会に向けて「12月の全国大会は、群馬県で開催されるので、出場枠が増え、3位まで出場できた。全国大会に出場することを目標にしていたが、果たすことができず、未練が残ってしまった。東日本大会までの1か月間は今大会で頑張った課題点を克服できるようにするため、少ない練習時間の中でしっかりと的中できるように、工夫しながら練習していきたい」と熱く語った。(松本)

### 紙面紹介

- 〈表面〉バレーボール部
- ・サッカー部
- ・弓道部
- 〈裏面〉台風の特集

## NOTE

10月31日未明に首里城で火災が発生した。この火災で、城の「正殿」や「北殿」、「南殿」などが全焼した。首里城が赤く燃え上がる姿に衝撃を受けた人も多いのではないだろうか。琉球王国の政治、外交、文化の中心地であった首里城。年間180万人以上の観光客が訪れる人気の観光地である。中国と日本の築城文化を合わせた独特な建築様式や石組み技術には高い価値があるとされ、首里城跡は2000年12月に世界遺産に登録された。鮮やかな朱色で彩られた姿は、沖縄のシンボルと言えるだろう。首里城の火災を受けて、日本各地で防火意識が高まっている。京都府では、世界遺産に登録されている寺社の防災担当者らが防火対策を協議する緊急会議が開かれた。設備の再点検やイベント時の注意点を改めて確認した。今回の火災で沖縄では様々な影響が出ている。首里城周辺の学校では、火災のショックで、遅刻したり、学校を休んだりする生徒が出た。このことから、沖縄県民がいかに首里城を「心の拠り所」としていたかが伝わってくる。首里城は再建が検討されている。荘厳な建築物や世界遺産を守り、伝えることは大切だが、これはただ「貴重」や「綺麗」という理由からだけではない。確かにこれらの要因も大きい。首里城が沖縄県民の「心の拠り所」となり、生活を支えていることが重要なのではないだろうか。沖縄のシンボルは5回目の再建へと進んでいく。(齋藤)

紙面割表・青木 裏・関原



# 市民に自主的な行動求む

## 復興急がれる台風被害



少林山通りの崩れた護岸

野橋、中乗橋が被害を受け、その中でも木造の佐野橋と中乗橋が完全に流された。また、少林山通りの護岸が崩れ通行止めになった。3000人を超える市民が各避難所に避難した」と語った。

また、復興状況については、一来年度の完全な復興を目指しているが、流れてしまった橋の復興は降水量が少なくなる渇水期の11月から5月末の間しか測量や工事を進めることができない。土砂が崩れないようにコンクリートで各所を覆い、被害を最小限にしていく。烏川流域のグラウンドも被害を多く受けてしまったので、復興を随時進めていきたい」と述べた。

10月12日に日本に上陸し、全国各地に甚大な被害を招いた台風19号は、群馬県にも大きな爪痕を残した。高崎市の主な被害については、高崎市役所総務部防災安全課の中町優太さんに話を伺った。

「高崎市の床上、床下浸水の被害総数は200件を超えており、倒木や土砂災害の被害総数は把握できていない。烏川流域では、八千代橋、左

野橋、中乗橋が被害を受け、その中でも木造の佐野橋と中乗橋が完全に流された。また、少林山通りの護岸が崩れ通行止めになった。3000人を超える市民が各避難所に避難した」と語った。

また、復興状況については、一来年度の完全な復興を目指しているが、流れてしまった橋の復興は降水量が少なくなる渇水期の11月から5月末の間しか測量や工事を進めることができない。土砂が崩れないようにコンクリートで各所を覆い、被害を最小限にしていく。烏川流域のグラウンドも被害を多く受けてしまったので、復興を随時進めていきたい」と述べた。

ついて、「『高崎市は災害時の被害が少なく安全な地域だ』という意識を持っている人が多いので、その意識を変えてほしい。災害時は学校のスピーカーや広報車からアナウンスをするが、雨などが降ることによって聞こえなくなってしまう。そのため、自分から情報を集めるなど主体的な行動をしてもらいたい。また、自主避難所に避難する際には、毛布などが置いてあると誤解をしないでほしい、身一つで避難所に来る人がいる。前もって、2、3日の生活ができる道具を持って来てほしい」と話した。

市民の人へ向けて災害対策



国土地理院の渡邊さん

ドマップについて話を聞いた。「国土地理院では、ドマップの制作はしていない

# 命を守るために

## ハザードマップの原点に迫る

が、主題図を制作している。主題図とは、地理的な事象を表し、伝達するための地図だ。そこに、地方自治体が洪水や土砂崩れなどの災害に関する情報を付け足して、ハザードマップを制作している」と話した。

主題図を作る上で意識していることについて、「主題図はハザードマップの基になっているため、避難時に参考にする人は多い。土地の容積や高低を正確に伝えることを特に意識している。主題図を

作る際には、その地域の航空写真と照らし合わせて間違いがないかを確認している。また、ハザードマップは全国で統一した形式を使っているため、差異が出ないように制作している」と語った。

日頃からやっておくべきことに関しては、「ハザードマップを見ておくことが重要だ。特に自宅から避難所までの移動経路は、いくつか候補を用意した方がよい。電柱が倒れていたり、浸水したりして道を通行することができないかもしれないからだ」と述べた。

最後に、「ハザードマップではないが、国土地理院のホームページで地理院地図を見ることが出来る。様々なことを学べるのでぜひ見てほしい」と話した。

### 連載第4弾

## 岡田先生に聞く 絶メシの魅力

皆さんは絶メシをご存じだろうか。絶メシとは、高崎市内で後継者不足など今後の経営に支障をきたしている飲食店を指す。今回、絶メシを巡っているという家庭科担当の岡田典子先生に話を伺った。

「絶メシ巡りを始めたいまきは、ホームページや新聞を見て

興味を持ったからだ。また、高高に勤務しているので、制覇したいと思った。

「絶メシの魅力は、昔からの常連客が多く、店の雰囲気馴染みやすいことや群馬の味を感じられるところだ。

「絶メシ巡りの進捗状況は、定期考査中の昼休みや夏休

み中に行っていた。しかし、まだ7、8軒しか行けていない。

「お勧めの店は、『うかい亭 一花』だ。普段肉は食べないが、このチキンかつはジュシーで美味しい。値段も手ごろだ。

「今後行きたい店は、



岡田先生お勧めのチキンカツ

「松島軒」の黄色いカレーが気になる。他の店も店長の体調で廃業に陥ったり、開店の状況が左右されるので早く巡りたい。

# 「良い経験ができた」

## 台風被害 ボランティア



左から直世君 匠生君

台風19号が接近し、おおよそ30人が避難した。そこ

ボランティアとして活動した川鍋直也君(1の5)に話を聞いた。

今回ボランティアに参加した理由を「高高の近くにあるため自宅は安全だったが、危険な地域があると知り自分ができることはないかと思った」と語った。

また、「雨風が強く、暗い中での活動に苦戦した。特に、田んぼに落ちた車を引き上げるのが大変だった」と苦しかった経験

「普段から部活動で体を鍛えていることや学校で身に付

けた知識が役に立った」と話した。

今回のボランティア活動について、「現場の状況を把握して宿泊場所の増設を速やかに学校に依頼した市職員の方々の判断力には驚かされた。自分たちができることは少なかつたが、校舎の構造を知る高生として避難の誘導はしっかりできたと思う」と口にした。

また、「ラジオは詳細な情報を早急に伝えてくれるため、災害時には重宝すべきだと思う。決して独断では行動せず、情報を基に判断しなければならぬ」と災害時に気をつけるべきことを話した。

最後に、これからのボランティア活動について「時間や場所などの条件が合えば積極的に参加したい。災害が多い日本に住む人間としての行動していきたい」と語った。

(小池)